



# お兄さんになつたね

岩間 里香

私は今年初めて担任を持ちました。保育経験は

一年と半分くらいです。年中組四歳児の花組を受

け持つことになり、期待と不安、そして気合

(?) はいっぱい。年度始めの年齢ごとの話し合

いでは、「年中組になったことだし、子どもたち

が、自分の力で身の回りのことやお友だちとのこ

と、遊びを楽しめるように援助をしていこう」と

大きな目標を持ちました。

四月、新学期が明けていよいよスタートです。

一人ひとりとあいさつを交わし、にこにこの顔が

揃いました。三月生まれのY君はとてものんびり

屋さんです。Y君の時間はとてもゆっくり動いて

いて、面白そうなものを見つけると、まっすぐそ

れに向かっていきます。そしてうれしい時は、大



きな声で笑い、両足でピョンピョン跳ね回りま  
す。とつても素直な男の子です。そんなY君が、  
四月の終わりくらいから、「幼稚園行きたくない」  
というようになりました。

#### 四月当初の様子

花組の子どもたちにこんなお話をする。

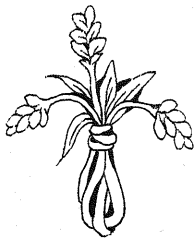
「みんな年中さんになったね。少しお兄さんやお  
姉さんになったから、幼稚園に初めて来たお友だ  
ちや、小さいお友だちに、やさしくしてあげよう  
ね。もし困っていたら、助けてあげようね」。子  
どもたちは「はあーい」と、とても元気に返事を  
する。「お兄さん、お姉さん」になったことがう  
れしそうだ。家庭でも「もう年中組になったんだ  
よ、がんばってね。小さいお友だちの面倒を見て  
あげてね」と話をした方が多かったようだ。

Y君は幼稚園のバスで通っている。バスから降

りると「おはよう！」と元気なあいさつ。「Y君  
（自分をY君という）花組さんだよ」と、よく  
言ってくる。「そうだね、花組さんになったから、  
二階のお部屋なんだよね」と言葉を交わす。  
私には「僕、年中さんになったんだよ」と、その  
喜びを伝えているように、主張しているように思  
えた。

年中組になるころには、ほとんどの子どもが身  
の回りのことは、自分でできるようになってい  
る。Y君は、お母さんの作ってくれるお弁当が大  
好きだが、小さなソースのケースや、ピニールに  
入った果物の入れ物を開けることがどうも面倒の  
ようだ。「自分ででき

ない」とちよつと、  
なげやりな様子。「一  
緒に手伝うよ」とい  
うが「先生がやって」





と、座ったまま。周りのお友だちは徐々に食べ終わり、片付けて遊びだした。たまたまY君も席を立て、遊びの輪に走っていく。「Y君、片付けてから遊ぼうね」というが、なかなかその気にはならない。「Y君、Y君」と呼ぶと、席に戻ってくるが、またすぐにお友だちのところへ……。お母さんと相談をして、大きなお弁当箱と小さな果物の箱の二つにしようが、片付けは苦手のようで（実は私もそうなので、その気持ちはよくわかる）片付けるよりも先に遊んでしまう。

Y君は着替えに關してもそうであった。「自分で着てみよう」というが、「着れない」といって、そこに座り込む。そして、楽しそうに遊んでいる友だちを見つけては、パンツのまま、その中に入って一緒に遊んでいる。とても楽しそうである。私の気持ちとしては楽しく遊んで欲しいのだが、でもやっぱりけじめもつけないと、と

悩み「Y君着替えてから遊ぼうね」と声をかける。一緒にシャツだけ着たところで、またすーっと走っていく。「Y君、じゃあ後はがんばって自分で着ようか」と言い残し、見守る。二十分ほど経っても、まだシャツとパンツのまま。もう五、六回は「Y君お着替えしようよ」と声をかけた。よっぽどその気にならない言葉がけなんだと反省する。いや、ここまでくると、落ち込んでしまう。こんな毎日が続く。

#### 四月中旬の様子

Y君は、その気になれば、自分で着替えたり、お弁当の片付けはできる。とても時間がかかるけれど。その間、何回声をかけるだろうか？ 遊んでは戻って（私が呼ぶので）、また遊んで。「先生、Y君パンツのままだよ」と教えてくれる子どももいる。でもたまたまに、「あれっポロシャツは着



たな」と思えるときもある。

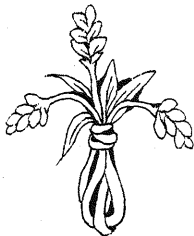
残念ながら、幼稚園には帰らなくてはならない時間がある。Y君の場合は、遊びたいという気持ち、それが先行してしまつて片付けや着替えが出来ない、それにちよつと苦手だし、面倒だという気持ちもあるのだろう（この面倒という気持ちも個人的にはよくわかる）。少しずつでもいい、やっぱり手伝いながらも自分でする気持ちになつてもらいたい。気長に「Y君、がんばつて片付けてみよう」「Y君もう帰る時間になつちやつたよ、早く着替えよう」と声をかける。だんだん余裕もなくなつてきて、帰る間際には「Y君、着替えないと帰れなくなつちやうよ」と、ちよつと強い口調になつてしまふ。「やゝゝだゝゝ」Y君は泣いてしまふ。「じゃあ一緒にスピードで着替えちやおう」結局、バンザイをして、上着もズボンも全部着せてしまふ。このような日々が続く。

#### 四月下旬の様子

いつもY君と同じところでバスに乗っているK君が風邪で二日ほど休んだ。二人はバスの中でも仲良しだ。二十分ほどの距離を楽しく過ごして行く。「T君、今日お休み？」Y君は元気がない。「うん、お風邪だつて」。次の日も「今日もお休み？」と聞く。しかし、Y君はしばらくすると、他のお友だちが遊んでいるところに入つていき、面白い動きなどをして、友だちを笑わせている。Y君はひょうきんものなのだ。

Y君の生活は変わらない。「Y君、もう着替えないと」。そして、また泣いてしまふ。

ある朝、幼稚園にいたバスから泣き顔のY君が降りてくる。





「先生、バスに乗るときからママと一緒にいた  
いって泣いていたんです」とバスの先生が心配し  
ている。「Yくんママに会いたいの？ ちよつと  
淋しくなっちゃった？」と寄り添う。「ママがい  
い、ママがいい」と泣いている。直感「ちよつと  
無理させすぎちゃったかなあ」。

その日の夜、お母さんに電話をする。「Yが幼  
稚園に行きたくないっていうんです。ちよつと心  
配で」とお母さん。やっぱりそうか。「年中組に  
なっているいろと自分でがんばろうって、ちよつ  
と無理させちゃったかもしれないです」と様子を  
話す。お母さんは妹もいるので、そのことも心配  
していた。もつとY君甘えさせてあげよう。焦ら  
なくてもいいんだ、そう思う。

### 五月連休明けの様子

Y君は水痘にかかり、約十日ほど家庭で過ごし

た。そして、久し  
ぶりの幼稚園、  
やっぱり泣いてい  
る。「Y君元気に  
なったんだね、よ  
かった。一緒にお

部屋行こう」というが「やあだあ」と激しい抵  
抗。「さみしいなあ、Y君と花組で遊びたい」「や  
あだあ、先生じゃあいやあーあ」「じゃあどう  
しようか？」「ママにお迎えきてって電話して」  
とY君。電話の受話器をとり、電話をしている振  
りをする。「お迎えに来るって」というと、うな  
ずく。でもまだ涙は止まらない。ママに会いたく  
て、どんどん涙はこぼれてしまう。一日中「ママ  
に会いたい」といつている。お母さんに協力して  
もらい、しばらく降園時間にお迎えにきてもらう  
ことになった。





## 五月中旬の様子

朝はまだ泣いてくることが多いが、面白そうなところには、すぐに飛び込んでいく。みんなを笑わせることも楽しんでる。でも、たまにはちよつと静かになると、「ママに会いたい」と泣いてしまう。

ある朝「お母さんがね、Y君ががんばったらうれしくて泣いちゃうって」と言ってきた。泣いていない。むしろちよつとすつきりした様子で元気に保育室のほうへ走っていく。ちよつとがんばっているのかな。お母さんも心配なんだ、私もY君との今この時間を大切にしようと思つて思う。着替えや片付けも手伝つては見守り、また手伝つては……と前よりも一緒にするように心がけた。

ある日のこと、お弁当の前にまた「ママ……」と涙が。「Y君、もう少ししたらママお迎えに来

るよ、みんなで遊んでいたら楽しくなっちゃうよ」と声をかける。しばらくして、Y君がお弁当箱を手に持ち、私のところへやってきた。「先生にコリコリあげる」。コリコリはY君の大好き物の柴漬けのことだ。「これおいしいんだよ、Y君大好き」と周りの友だちによく教えてあげている。よかった、うれしかった。Y君の大好きなものをくれるなんて。「うわあ、うれしい。Y君くれるの？ ありがとう。じゃあいただきますをしたら、Y君のところに行くね、こぼさないように上手に机まで持つていってね」。私では嫌で、お母さんがよかったY君が、また少し近づいてくれた。(結局、コリコリはあつという間にY君の胃におさまり、私の口に入ることはなかった)。

## 五月下旬の様子

Y君は幼稚園が大好きになったようだ。にこに



こ顔で登園する。帰るときもバスに乗って帰る。たまにお迎えに来てくれる時は、うれしいのか

「今日お迎えです」とはっきりした口調で言ってくる。「はい、わかりました」というと、安心してように保育室のほうへ走っていく。私の知らぬ間に職員室にまで行って「今日お迎えです」と言っているらしい。すつかり頼もしくなった。

ある日のこと、いつものように帰る前に着替えをしていると、「先生、Y君ね、一人で着替えちゃった。お兄さんだからね」と着替えの終わったY君が立っている。ズボンの吊りはくるくるとよじれて、そのまま引き上げたズボンにポロシャツは収まることなく、もたーつとズボンの外にこぼれている。「Y君、すごい自分で全部着ちゃったね。がんばって着たね」。Y君はとても満足そうだ。

Y君は今も、面白いことが大好きで、みんなを楽しくしてくれる存在です。

「新学期」「年中組」などという区切りは私達が都合上つけてしまったもの。それで、「今日からはお兄さん」なんて言われても、子どもにしてみたらずいぶんと、無理な話です。それぞれの持っている力に合わせて保育してきたつもりでしたが、子どもにとっては、一日一日が精一杯生きている小さな区切りで、それがただずーと続いているだけで、その中でゆつくりと成長しているのに、と反省しました。ちょっとがんばりすぎてしまった年度始めでした。

(城北幼稚園)